

ケニアを訪れて

京都大学院 都市社会工学専攻 修士2回生 三木博子

3月6日から21日までの16日間、ケニアを訪れました。様々な経験をし、言葉では言い尽くせないほど充実した時間を過ごさせて頂きました。まずは、このスタディツアーでお世話になりました木村先生、喜田様、松本様、酒井様、ナイロビでお世話になりました本庄様、またマトマイニチルドレンズホームの菊本様に心より感謝申し上げます。このような貴重な機会を頂き、本当にありがとうございました。

私がケニアへの訪問を決めたきっかけは、学部時代に受講した木村先生の講義であった。「技術で人々を幸せにする」「現地の人々自身の力で成し遂げられる発展が幸せにつながっていく」というお話、そして土嚢を用いた道直しに関する講義はとても印象的で今でも忘れられない。

ナイロビで乗り継ぎ、エルドレッドに到着した翌日、道直しの現場へ向かった。私は Erick 家にホームステイをさせてもらいながら、道直しプロジェクトに参加することとなった。私達が体験した作業は、土嚢を積んだ上に砕石された石の運搬、コンパクションという土の締め固めや井戸の水汲みなどであったが、どれもとてもハードな作業であった。しかし、共に汗を流して働く中で、スワヒリ語を教えてもらったり、休憩中にはおちゃめなママが歌ってくれたり、ケニアと日本の生活のことを教え合ったり・・・と様々な楽しみがあった。休憩中に飲んだウジという飲み物は初めての味だったが、飲んでいるうちに癖になった。アフリカの人々のパワフルさとおもしろさ、そしていつも気遣ってくれる優しさを何度感じたことかわからない。



道直しの様子

共に作業をする中で、住民の方へのインタビューを持つ機会があった。このインタビューを通して、道直しプロジェクトが多くの人にとって重要なプロジェクトであると感じられた。将来技術者として働くための技術を身につけたいという意見を聞いた時には、土嚢プロジェクトが「自身の力で成し遂げられる発展」につながっていくのだろうと強く感じた。またグループ活動としての良さも聞かれた。一見したところではわからないが、この地域では5年ほど前の大統領選挙後に民族間の対立による暴動が発生しているとの背景があるそうだ。たった数年前にそんなことがあったとは信じられないような穏やかな村だった。陽気で暖かい人々でいっぱいこの村の穏やかさがずっと続いていくことを願わずにはいられなかった。



近所の子供達



朝食のチャイとチャパティ

そして何よりステイ先での生活が忘れられない。DOREEN ママと一緒に夕食を作り、皆でお祈りをして夕食。夜ふと見上げた星空は今までの人生で一番美しかった。「信じられないくらいきれい！」と繰り返す私に DOREEN ママはにっこり笑っていた。毎日 9 時には就寝。翌朝ニワトリの鳴き声と共に起床。週末には家族で教会へ行き、午後には近所のお家を訪ねたり、子供達と遊んだり。一歩家の外へ出れば近所の子供たちが集まってきて、家へ遊びにおいでよと招待してくれた。そして、あつあつの甘いチャイとチャパティで振る舞ってくれた。子供たちの輝く笑顔は今でも私の宝物だ。

ホームステイ後はナイロビに戻り、マサイマラへ。テレビでしか見たことのなかったサバンナの動物達を目前に見た。その後 4 日間、マトマイニチルドレンズホームでお世話になった。スラムへの訪問、子供たちとの交流、そして菊本さんに様々なお話を伺い、大変勉強になった。マトマイニの目標は「自立」であるとおっしゃった。そのためにマトマイニでは、多くの有機野菜や植物を育てておられる。またスラムのママたちの自立のために、託児所に子供を預けながら働けるフェルト工房がある。工房での作業に参加させてもらったが、働く人々の顔は生き活きと輝いていた。



マサイマラで見た朝日



フェルト工房で働く人々と

今回のスタディツアーを通して、たくさんのことを学べた。私の中での途上国開発に関する明確な答えはまだ見えない。でも気付けたことがある。日本にあってケニアにないものはたくさんある、だが、ケニアにあって日本にないものもまたたくさんあるということ。拡大し続けるスラム、衛生問題、貧富の差、・・・解決すべき社会問題はたくさんあり、やはり支援は必要なのだと思う。しかし、問題点について考えさせられるとともに、便利な生活の中

で見えにくくなっている人と人との密なつながりの暖かさを改めて感じさせてくれた。なぜなら、私が訪れたケニアで感じたのは、村中が一つの家族のような暖かさ、訪れた人々を最大限歓迎しようとする心、そして人々のパワフルさであったからである。「ケニアは日本と同じ発展をしなくていいのです。」とおっしゃった菊本さんの言葉が色々なことを物語っているように、ケニアはケニアの良さを残したまま発展していったほしいと願った。「自立へのきっかけ作り」「現地の人々自身の力で成し遂げられる発展」について深く考えるこれ以上ない機会を持つことができた。この2週間の経験は決して忘れないと思う。

最後になりましたが、私達の軽率な判断により寄り道をして帰宅が遅くなりました。多くの皆様にご心配をおかけすることとなり大変申し訳ありませんでした。また、本当に多くの皆様に支えて頂き、このような有意義な2週間を過ごすことができました。改めて、全ての人との出会いに感謝を申し上げて、この報告を締めくくらせて頂きたいと思います。本当にありがとうございました。この経験を糧にして、今後努力していきたいと思っています。